（別紙８）

［認知症対応型共同生活介護用］

１．　評 価 結 果 概 要 表

作成日　平成 20年 11月　20日

【評価実施概要】

事業所番号	０１７２３００１５４		
法人名	有限会社　老古美興産		
事業所名	グループホーム　「そよかぜ」岩内		
所在地	岩内郡岩内町字栄２番地１０ 電話：　０１３５－６２－１１００		
評価機関名	株式会社　社会教育総合研究所		
所在地	札幌市中央区南３条東２丁目１		
訪問調査日	平成20年11月12日	評価確定日	平成20年11月26日

【情報提供票より】（　平成２０年　１０月　１日事業所記入）

（１）組織概要

開設年月日	昭和・平成　１４年１２月１日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9　人
職員数	10 人	常勤　9人，　非常勤　1人，　常勤換算　8.8人	

（２）建物概要

建物構造	木造モルタル　造り
	２階建ての　2 階部分

（３）利用料金等（介護保険自己負担分を除く）

家賃（平均月額）	30,000　円		その他の経費（月額）	光熱水費：　15,000円
敷　金	有（　円）		無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	有（　円） 無		有りの場合 償却の有無	有　／　無
食材料費	朝食	200　円	昼食	350　円
	夕食	350　円	おやつ	100　円
	または1日当たり　円			

（４）利用者の概要（　１０月　１日現在　）

利用者人数	9 名		男性　名	女性	9 名
要介護１	1	名	要介護２	1	名
要介護３	5	名	要介護４	1	名
要介護５	1	名	要支援２		名
年齢	平均	84 歳	最低　69 歳	最高	93 歳

（５）協力医療機関

協力医療機関名	社会福祉法人北海道社会事業協会岩内病院・吉田歯科医院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

グループホーム「そよかぜ」岩内は、岩内バスターミナルから数分という町の中心に位置している。創設者は、家族の介護の経験から高齢者福祉の必要性を認識し、当施設を開設した。施設長は、特別養護老人ホームや障害者施設などの施設長の経験を活かし、開設当初から「そよかぜ」岩内の運営に携わり、利用者が安らぎと喜びのある日々をその人らしく送れるよう、日々接している。管理者と職員は常に向上心を持って介護に携わり、利用者一人ひとりの思いを汲み取る努力をし、明るく温かみのあるグループホームを作りあげている。職員の離職も少ないため、利用者と職員との間には家族の様な親しみのある関係作りが出来ており、ホーム内には明るい会話と笑顔があふれている。

【重点項目への取組状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取組、改善状況（関連項目：外部4）
	前回の取り組み項目である、地域との交流や同業者との交流は積極的に行われるようになり、今後も前向きに取り組んで行く意向である。他の項目に関しても、意欲的に取り組みが行われておりほぼ達成されている。
	今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）
	自己評価は、会議で全職員に項目毎に意見を出して貰い、管理者と主任がまとめ上げて作成した。自己評価を行うことにより、職員は日々の介護を振り返ったり、介護に関して改めて気づいたりする事が出来たと有意義に捉えている。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）
	運営推進会議の開催は年間２回と少ない状況であるが、昨年は利用者の状況報告、年間行事、地域交流などの議題と共に外部評価を議題として取り上げ、評価に対する意見交換が行なわれている。運営推進会議に参加している民生委員、福祉課課長、町議会議員、家族等から出された意見やアドバイスは、貴重な意見として日々の介護に役立てられている。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）
	玄関に投書箱を設置したり、家族の来訪時に話をして、会話の中から家族の気持ちや意見、不満を積極的に引き出そうとしている。家族からの何気ない言葉も貴重な意見として受け止め、会議で話し合い情報と対応を職員全員で共有している。
重点項目④	日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）
	前回の外部評価を踏まえ、地域に事業所を理解して貰えるように努力し、今年度から町内会に入会して、町内のゴミ拾いに利用者と一緒に参加したり、町内のお祭りを見に行ったりしている。老人会への加入は地域性もあり難しい状況であるが、老人クラブの発表を見に行ったり、認知症の家族の会に参加して、職員が介護劇を発表するなどの交流が行われている。

2．　評 価 結 果 （詳細）

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営 **1．理念と共有**					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	開設当初に社会福祉協議会の局長の協力を得て、職員全員で「住み慣れた町、住み慣れた地域、高齢であっても安らぎと喜びのある日々を、その人らしく過ごして頂きたい」という事業所独自の理念を作りあげている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念は、玄関や居間などに掲げられ、職員の机などにも置かれている。朝の申し送り時や介護計画を作成する時などに理念について触れる事により、常に職員は理念を意識して日々の介護に携わっている。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	前回の外部評価を踏まえ、地域に事業所を理解して貰えるように努力し、今年度から町内会に入会して町内のゴミ拾いに利用者と一緒に参加している。老人会の加入は地域性もあり難しい状況であるが、老人クラブの発表を見に行ったり、職員は町主催の認知症介護劇などに参加して交流に努めている。		
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の自己評価は、会議で全職員に項目毎に意見を出して貰い、管理者と主任がまとめ上げて作成した。自己評価を行うことにより、職員は日々の介護を振り返ったり、介護に関して改めて気づいたりする事が出来たと有意義に捉えている。前回の取り組み項目は、ほとんど積極的に取り組みが行われ、今後も前向きに取り組んで行く意向である。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	開催は年間２回と少ない状況であるが、前回は外部評価を議題として取り上げ、評価に対する意見交換が行なわれている。運営推進会議に参加している民生委員、福祉課課長、町議会議員、家族から出された意見やアドバイスは貴重な意見として日々の介護に役立てられている。	○	今後は、運営推進会議の開催を増やすと共に、利用者にとって身近な議題を取り上げる事により、会議に利用者も参加出来るようになる事を期待したい。
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	町役場とは、事務的用件の他にも気軽に相談出来る関係が出来ており、介護計画や外部評価についての疑問点など具体的な相談を行い、日々の介護やサービスの向上に取り組んでいる。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	毎月「そよかぜ便り」を発行し、利用者の様子を写真を交えて家族に知らせている。金銭出納帳のコピーと領収書も毎月送付している。体調変化などは、随時電話で連絡して状況を報告し、家族の来訪時には、利用者の様子を詳しく話している。	○	毎月発行している「そよかぜ便り」は、全体の様子の報告のみになっているので、今後は個別の様子も記入して家族に報告する事を期待したい。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に投書箱を設置したり、家族の来訪時に話をして、意見や不満を積極的に引き出そうとしている。家族からの何気ない言葉も貴重な意見として受け止め、会議で話し合い情報と対応を共有している。外部の苦情窓口機関も玄関に掲示している。	○	家族からの言葉を文書として残すと共に、更に積極的に家族の意見を汲み取りたい意向なので、その方法についても今後検討して行く事を期待したい。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動はなく、離職もほとんどなく職員は定着している。以前、職員が退職した時は利用者全員に報告をしている。退職した職員について質問が出た時は、その都度繰り返して説明する事により利用者は動揺する事なく過ごしたという経緯がある。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
5．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	運営者や管理者は、職員教育に積極的に取り組んでおり、グループホーム協議会などが主催する外部研修に全職員が、年間２，３回参加している。職員も外部研修の必要性を認識しており、積極的に参加して介護に役立てようとしている。研修後は内部での報告も随時行われ、全職員で研修内容を共有している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	前回の外部評価を踏まえ、倶知安のグループホームと職員が交代してお互いの仕事を経験したり、後志など、近隣町村のグループホームと相互訪問するなどの交流が行われている。今後も、近隣のグループホームとの相互訪問を積極的に行って介護に役立て行く意向である。		
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居時には、安心して入居して貰えるように管理者や職員が利用者の自宅や病院に会いに行き、その後事業所に遊びに来て貰うなど、スムーズに入居出来るような配慮をしている。新しい入居者に対しては、寄り添って利用者との話の仲立ちをしたり、社交的な利用者と仲良くなって貰うように努力している。		
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者から、蕗の煮方や梅酒の作り方を教えて貰ったり、魚をおろして貰うなど日々の生活の中で共に支え合っている。利用者が冗談を言って笑ったり、昔話をして涙ぐんでいる時など、一緒に笑ったり泣いたりして、職員も利用者と喜怒哀楽を共にしている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人や家族の歴史などの情報を収集するための用紙（センター方式）を活用することで思いや意向を把握している。表情が変化した時の状況を、申し送りで話し合うことでケアの失敗や成功を共有し、日々変化する思いの把握に努めている。		
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	介護支援専門員と担当者が介護計画の原案について話し合い、職員会議に諮り意見交換を経て作成している。担当制となっているが全職員が一人ひとりの利用者の状態を把握している。利用者の状態に応じて、介護計画を説明し居室に掲示したことがあるが本人の負担となったことがあり、現在は行っていない。利用者の視点での表現方法を検討中である。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	短期目標は3ヶ月であるが、前回の外部評価の取り組みに沿って、月1回の定期的な見直しを行う事により、利用者の状況を細かく把握する事ができるようになった。職員は日々のケアがより一層充実してきていると感じている。また、食事の量が低下してきたり、行動に変化が生じるなど、心身の状態に応じて随時、見直しを行い新たな介護計画を作成し、家族に説明している。		
3．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	町からの要請で管理者が認知症のキャラバンメイトの講師を務めている。昨年は2回、今年に入ってからは1回実施し、サポーター養成講座で認知症のケアの講座を担当した。また、町主催の介護劇に職員が参加するなど、事業所の多機能性を活かした地域貢献を行っている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
4．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	歯科などの診療科目は入居前のかかりつけ医の受診を継続している。婦人科、循環器科などは町外の医療機関への通院介助を行っており、点滴が必要となった場合は医師、看護師と連携しホーム内で実施している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化した場合や終末期のあり方については入居時に家族と話し合いを行っている。本人、家族の意向に沿い医師の指示の下、今年の4月に看取りを行っている。事業所としては今後も看取りを行っていきたいと考えている。	○	看取りに関する事業所の方針を、書面にて明確化することができるよう、期待したい。
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 **1．その人らしい暮らしの支援** （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	岩内の浜言葉は、怒鳴っているように聞こえるため、言葉かけは一人ひとりの生活歴に応じて配慮している。記録は1階の事務所や2階のスタッフルームに保管し個人情報の保護を徹底している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間以外は、日課は定めていないが起床が遅い場合は、朝食時間を変更するなど柔軟に対応している。毎月、カレンダーを手作りしたり、毛糸で靴下を編んだり、食事の後片付けをするなど本人のペースで生活することができるよう支援している。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	日々のケアを通して、さりげなく食事の希望を把握し、夜間の勤務時間帯に2週間から3週間分の献立を作成している。「そよかぜラーメン」「かぼちゃ団子」など利用者の人気を得ている献立もある。お膳や箸を並べるなど一人ひとりの力を活かしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴日は通院介助の無い日を選んで決めている。週に2回から3回の入浴を目標としているが拒否がある場合は、面会時に家族から言葉をかけてもらうなどの工夫をしている。脱衣所に複数の入浴剤を用意し本人が選ぶことができるように支援している。		
(3)その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	カーテンの開閉、お風呂掃除、梅酒作り、雑巾縫い、編み物など一人ひとりが役割を持って生活している。また、居間の大きな窓から国道を走る車や街の風景を眺め、絵を描く利用者もいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	夏季は近隣の噴水のある公園や、トイレ、ベンチなどの設備が充実している文化センターなどへ散歩に行っている。月に1回の外出行事では、郷土館や回転寿司に出かけたり、一対一の外出では、美術館や喫茶店で過ごす時間を設けている。		
(4)安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は施錠していない。階段に鈴を付けた暖簾を掛けているので、出入りを確認することができる。「出かけます」と意思表示がある場合は一緒に外出したり、一人で出かけたい場合は、後ろから静かに見守りをしている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年2回、利用者参加で消防署の指導の下に消火器の使用や夜間を想定した訓練を行い、緊急連絡体制や避難マニュアルなどを作成している。もらい火による火災も考えられるので、運営推進会議で話し合い、地域の人々の協力を得られる体制作りをしている。		
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事から水分を摂ることができるよう、朝食には牛乳を付け、毎食、汁物やお茶を用意している。職員は協力医療機関主催の栄養教室に参加し栄養バランスなどについて学んでいる。また、食事や水分量が低下してきた場合は、ゼリーや好みのジュースで補っている。	○	献立については、保健所の栄養士による専門的な栄養管理を受けていたが、継続的な管理には至っていないので、協力医療機関などに相談することで継続的な栄養管理を受けることができるよう、期待したい。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり (1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具屋を改装し、1階に玄関、事務室、会議室、ホールがある。2階が居住スペースとなっており、居室の出入り口には暖簾を掛け、顔写真、氏名、たんぽぽや水仙などの花の名前を掲示している。台所はカウンター式となっており、配膳や下膳がしやすいよう工夫されている。居間の大きな窓から自然光が差し込んでいる。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	クローゼット、暖房機は備え付けとなっており、床はフローリングでバリアフリーとなっている。カーペットを敷いたり、自宅で使用していた箪笥や琴を持ってきている利用者もいる。窓から向かいの家の畑や庭、印刷所などが見え、地域での生活を実感できる。		

※ ▒ は、重点項目。

※ ＷＡＭＮＥＴに公開する際には、本様式のほか、事業所から提出された自己評価票（様式１）を添付すること。